

2022年3月
西海考古第12号抜刷

古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流
— 西北九州と有明海沿岸地域を中心に —

立谷 聡明

古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流

— 西北九州と有明海沿岸地域を中心に —

立谷 聡明

I. はじめに

弥生時代の九州地方は、早くから北部九州・中九州地域を筆頭に、多数の鉄器が集落・墳墓から出土したこともあり、当該期の鉄器研究を牽引して来た。列島全体で鉄器の出土事例が大幅に増加した今日でも、弥生時代の日本列島内において、鉄器の量や普及率が、九州地方を西端として西高東低の様相を呈することは、変わらない周知の事実である。

一方で、佐賀県唐津市以西の、いわゆる西北九州地域は、広大な平野が発達せず、山がちな地理的背景から、拠点的な弥生時代の遺跡は限られる。このためか、墓群から出土する鉄器類の出土数も少ない状況にある。また、佐賀県南部に広がる佐賀平野では、当時の海岸線にほど近い背振山地の南部に広がる段丘上に遺跡が立地する傾向にあり、河川沿いを中心に弥生時代の拠点集落や集団墓地は多々存在するものの、鉄製武器を多数保有する墓群は一部に限られている。そのため、西北九州・佐賀平野両地域は、福岡平野や周防灘沿岸（東北部九州）地域の資料を検討の中心に据えた上で、縁辺地域として扱われる傾向が強く（児玉 1982、大庭 1986 など）、資料的制約も相まって当該地域の鉄製武器に対して主体的な検討を行える素地が整わなかった。

この状況を変える契機となったのは、2000 年以降、西九州自動車や西九州新幹線などの大規模開発に際して行われた、佐世保市門前遺跡や唐津市中原遺跡などの調査である。両遺跡の墓群からは、素環刀や鉄剣を中心に、多数の副葬鉄器が出土し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の西北九州地域でも大型鉄製武器を保有する集団が存在したことを証明することとなった（副島ほか編 2006、小松ほか編 2012）。また、中原遺跡では墓群とほぼ同時期の鍛冶工房群もみつかっており、自家消費量を大きく超える鉄器生産が行われていたことが指摘されている（小松 2014・土屋 2014）。

以上のような近年の調査成果や、鉄製武器研究の進展（杉山 2015・2017、ライアン 2017・2021）を受け、筆者は以前、弥生時代の鉄製武器（戈・刀剣・鏃）を対象に、弥生時代終末期前後における九州地方内の生産・流通について、私見をまとめる機会を頂いた（立谷 2020: 以下前稿）。その際、素環刀と大型透孔付鉄鏃（以下大孔鏃）の特定型式が、西北九州地域を含む肥前西部や有明海沿岸地域（佐賀平野・筑後川流域）に分布する傾向にあり、福岡平野・中九州地域産と考えられる鉄器類と排他的な分布傾向を示すことを指摘した。また同時に、弥生時代後半期における九州地方内での三つ目の大規模な鉄器製作候補地として、中原遺跡が重要な位置を占めていた可能性についても言及した。

以上のような調査成果の蓄積や近年の鉄製武器研究の進展を鑑み、改めて本稿では、西北九州地域と有明海沿岸地域を分析の軸に据え、素環刀（註 1）と大孔鏃の二器種を主に取り扱う鉄製武器として選択する。対象とする時期については、上記二種の鉄製武器の盛行期である、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭を中心に進める（註 2）。

また、素環刀・大孔鏃と盛行期・衰退期をほぼ同じくし、西北九州地域から有明海沿岸、筑後川流域を分布域とするなど、共通点の多い、方形透かしを持つ装飾器台である「肥前型器台」を比較資料として用いることで、両地域間のつながりについて、整理・考察を深めることを目的としたい。

表 1 素環刀型式分類

型式	法量	環頭部	茎尻	茎平面	関	環断面	茎断面	
I型	a1類	対称	直線	大刀	無・微	円形	三角形・台形	
				小刀				
				刀子				
	a2類			大刀	有	直	円形	台形・(矩形)
				小刀		直・広		
				刀子		直・広		
b1類	刀子	湾曲	直・微広	無・微	円形	矩形		
b2類			微広・広					
C2類			微狭					
II型	a1類	非対称	直線	(直)・微広	無・微	矩形	台形・矩形	
				(微広)・広				
	a2類		刀子・小刀	斜線	(直)・微広	有	矩形	矩形
	刀子				(直)・広			
	b1類		刀子	湾曲	狭	無・微	矩形	矩形
	b2類							
C1類	刀子	湾曲	狭	有	矩形	矩形		
C2類								

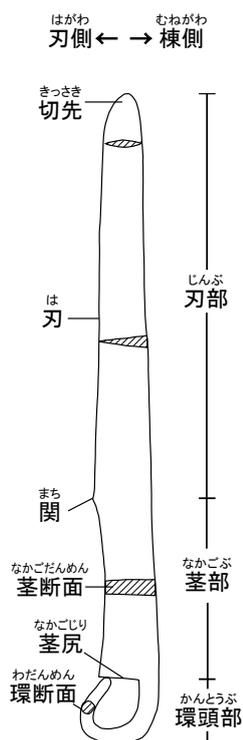


図1 素環刀各部名称

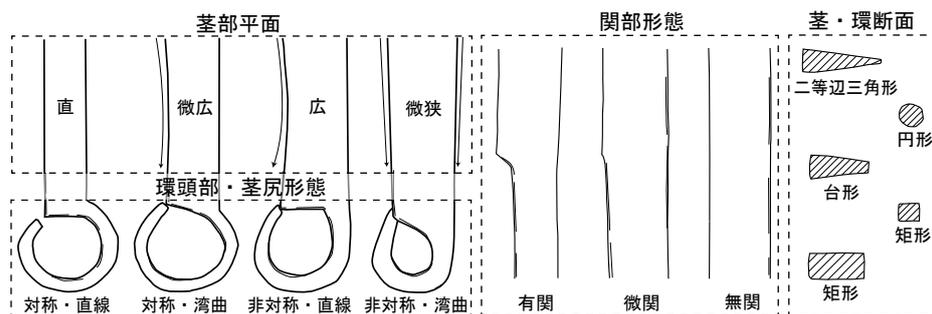


図2 素環刀分類属性模式図

II. 素環刀と大型透孔付鉄鏃研究の現状

まずはじめに、素環刀 (図1) と大孔鏃 (図4) の研究略史と型式分類を確認しておきたい。

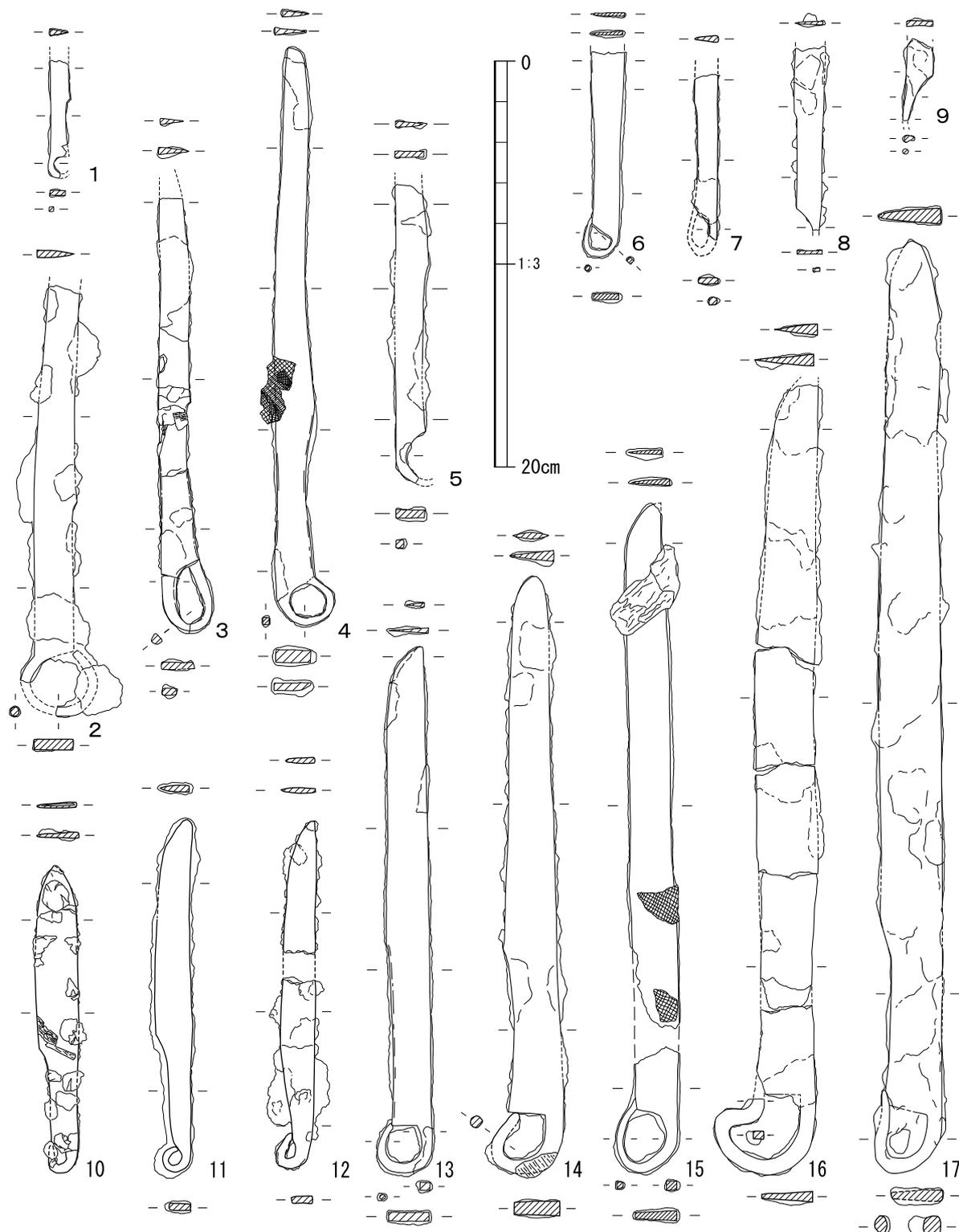
(1) 素環刀

素環刀については、これまで法量や環・茎・関の平面形に注目した分類のもと、その製作地を大陸または列島産とみるかで議論されてきた (今尾 1982、児玉 1982、池淵 1993、川越 1993 など)。これに対し、近年では、新たに茎断面や環断面などの属性が導入され、より立体的に刀身形態・製作技法を把握することで、列島各地で特徴的な素環刀が製作されていたことが明らかになった (豊島 2005、立谷 2017)。

このような研究史の中で筆者は、鍛打による製作技法を反映する可能性の高い「環と茎尻の平面形」を最も重視し、環と刃部の造り出し方と連動する「茎部の平断面形」「関の深さ」「環の断面形」についても考慮した分類案を提示した (表1・図2)。なお、法量区分については、九州地方出土の素環刀の全長比較により、全長 35 ㎝と 56 ㎝付近に分布の変化が認められるため、これらを境に刀子・小刀・大刀に三区分している (立谷 2019・2020)。本稿では、各素環刀型式に対し、「II型 a2類」のように表示することとし、関の深度を特に重視しない場合は、英数字を割愛し、「II型 b類」と示す (註3)。

筆者が分類した素環刀のうち、本稿内で重要になるのは、九州地方において弥生時代後期後半に出現・急増し、古墳時代前期前半頃に消滅する I・II型 b類である (註4)。前稿においては、各素環刀型式の分布を確認した上で、各地域の鉄器生産痕跡の有無や、その消費 (廃棄) 方法、大陸・半島の素環刀からの製作技法の改変・省力状況を加味して、その製作候補地を推定した (立谷 2020)。

その中で、本稿に係る内容をまとめると、まず II型 a類 (図3-13~17) については、茎尻を直線的、茎断面を台形に仕上げる点など、他の型式と比べ工程上の簡略化がみられず、その類例も朝鮮半島の北漢江流域に集中して確認されていることから、舶載品と位置付けた。次の II型 b類・I



- | | | |
|-------------------------|---------------------------|---------------------------|
| 1. 汐井掛A143木棺墓 : I型b2類 | 7. ヒルハタ205・6住居跡 : II型b2類 | 13. 門前3号箱式石棺墓 : II型a1類 |
| 2. 中原SP13418木棺墓 : I型b2類 | 8. 中原SK13425土坑墓 : II型b1類 | 14. 高津尾南3号箱式石棺墓 : II型a2類 |
| 3. 宮ノ前A99号住居跡 : II型b2類 | 9. 中原SX12012周溝 : 未製品 | 15. 門前4号箱式石棺墓 : II型a1類 |
| 4. 門前2号箱式石棺墓 : II型b2類 | 10. 池部朝鍋41号住居跡 : II型c2類 | 16. みやこSP1001石棺墓 : II型a1類 |
| 5. 古子SC06木棺墓 : II型b2類 | 11. 吉野ヶ里SH081住居跡 : II型c2類 | 17. 元宮29号土坑墓 : II型a2類 |
| 6. 門前1号土坑墓 : II型b1類 | 12. 唐原SC-71 : II型c1類 | |

図3 I型b類とII型素環刀の諸例 (S = 1/3)

表2 大型透孔付鉄鏃型式分類

型式	関形態	穿孔分類	刃範囲	備考	柳田分類	
柳葉式	A I型	直	1・2類	横刃	槍形鏃	柳葉形A類
	A II型	ナデ	1・2類	横刃		
	B I型	無	1～3類	先刃	圭頭鏃を包括	柳葉形B類・圭頭形
	B II型	無・微	2～4類	横刃		柳葉形A類
	C型	無	2・3類	横刃		椿葉鏃

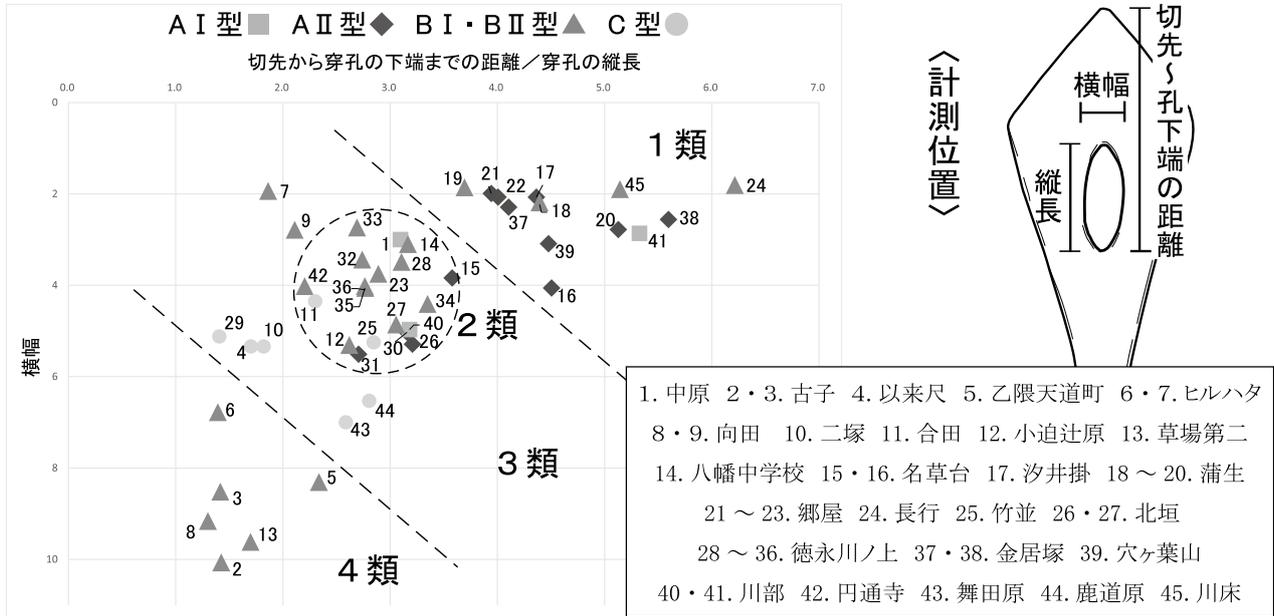


図4 大型透孔付鉄鏃の法量分布図(左)と計測位置(右)

型b類(図3-1~8)については、環をわずかに棟側に曲げるか否かという点にしか形態差がないことにくわえ、中原遺跡において、棟側に環を曲げるI型b類の特徴を持ちながら、II型b類に酷似した未製品(図3-9)が出土していることから、両型式が唐津平野産である可能性を指摘した。

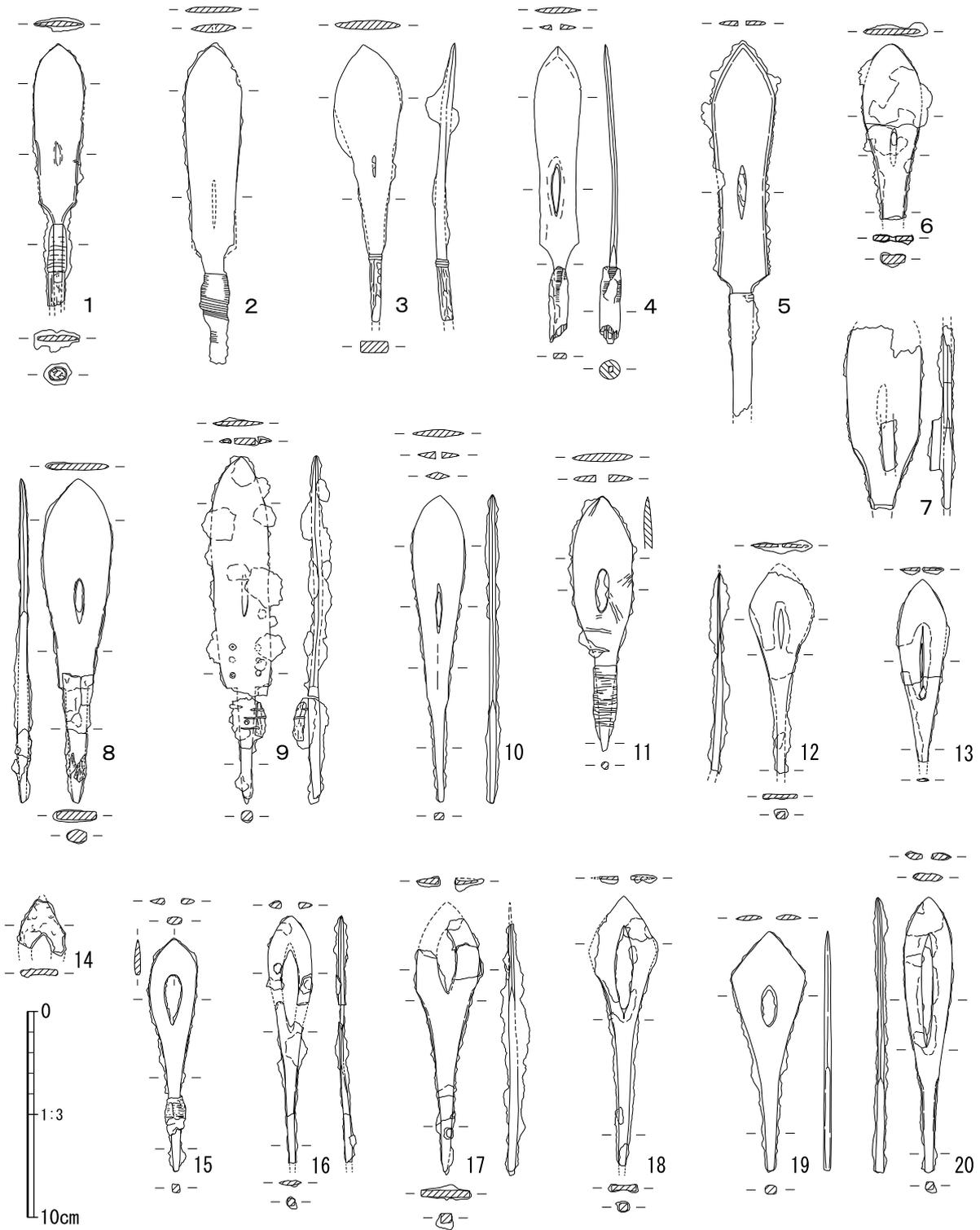
最後に、II型c1類・c2類(図3-10~12)は、それぞれ福岡平野・中九州地域に分布がまとまる。両型式は、関・茎・環を明瞭に区別しておらず、舶載品と比べ最も製作技法の簡略化・改変がみられる。このII型c類の分布がまとまる両地域では、当時活発な鉄器生産が行われていたと考えられることから、分布域の近隣で製作された在地生産品であると考えた。

(2) 大型透孔付鉄鏃

次に、大孔鏃にかんしては、柳田康雄氏による四分類案(表2:右端)に基づく、弥生時代後期~古墳時代前期の編年案を土台とする(柳田1997)。この他に大孔鏃を主体的に取り扱った論考としては、管見の限り大澤元裕氏のものがある程度である。大澤氏は、副葬品以外の集落出土例を含めて大孔鏃を再集成し、出土遺構によって鏃の取り扱いの差が認められることを明らかにした。また、大孔鏃の時期区分についても言及し、その主体が弥生時代終末期~古墳時代前期前半にあることを追認した。

しかし、鏃身形態や透孔については、十分検討が行われたとは言い難く、その流通経路については、概念的見解にとどまっている(大澤2006)。そのため筆者は、前稿において、鏃身の再検討を念頭に置き、「穿孔の位置」「長さ」「幅」などの特徴を反映するため、切先から穿孔下端部までの距離と穿孔の縦長の割合・穿孔幅の比率を計測し、鏃身形態と穿孔がある程度対応関係にあることを示した(図4)。

また、鏃身形態の細分については、柳田氏の分類案をもとに、関の有無・形態を重視しつつ、細分困難な一部の圭頭鏃と柳葉鏃については、包括してB型とした上で、川畑純氏の古墳時代鉄鏃に対する刃部の分類視点を参考に(川畑2009)、鏃身部の先端に刃を持つものを「先刃」(B I型)、鏃身部の



- | | | |
|--------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|
| 1. 蒲生76号石蓋土坑墓 : A II 型1類 | 8. 川部 S 2 号墓 : A I 型2類 | 15. 草場第二33号石棺墓 : B II 型4類 |
| 2. 金居塚 13 号墓 : A II 型1類 | 9. 中原 SP13230 木棺 : A I 型2類 | 16. 古子墳丘盛土中 : B II 型4類 |
| 3. 長行 2 号石棺墓 : B I 型1類 | 10. 徳永川ノ上 CVII-44 号墓 : B II 型2類 | 17. 古子 02 号木棺墓外? : B I 型4類 |
| 4. 徳永川ノ上 E4-3 号棺 : A II 型2類 | 11. 舞田原 7 号住居跡 : C 型3類 | 18. 向田 8 号石棺墓 : B I 型4類 |
| 5. 北垣 8 号石棺墓 : A II 型2類 | 12. 向田 8 号石棺墓 : B I 型3類 | 19. 乙隈天道町 B53 号住居跡 : B II 型4類 |
| 6. 八幡中学校 17 号墓 : B I 型2類 | 13. ヒルハタ 77 号住居跡 : B I 型3類 | 20. ヒルハタ 64 号住居跡 : B II 型4類 |
| 7. 竹並 A-15 号墓南 IV01 土坑 : C 型2類 | 14. 門前 4 号集石遺構 : B 型4類? | |

図 5 大型透孔付鉄鏃の諸例 (S = 1/3)

側面部にまで刃を持つものを「横刃」(B II型)として細分を行った(註5)。これによって、大孔鏃分類は、鏃身五分類に穿孔四区分を組み合わせた形で、「A II型3類」のように示すこととする。

さて、前稿の検討によって得られた大孔鏃についての見解の中で、本稿内で最も重要なのは各鏃身型式が特定地域に集中して分布することにくわえ、鏃身に組み合わさる透孔にも偏在性が確認できることである。大孔鏃の詳細な分布状況については次章にゆずるが、関を持たない一群(B・C型)と、関を持つ一群(A型)は、それぞれ有明海沿岸・筑後川上流域と周防灘沿岸地域に偏在し、明らかに異なった分布を示す。また、本稿では取り扱わないが、大孔鏃の空白域である福岡平野・中九州地域は、無茎三角鏃の鏃身に多数の小孔を穿つ「多孔鉄鏃」の集中域であることも示唆的である(立谷2020)。

Ⅲ. 素環刀と大型透孔付鉄鏃の分布状況

素環刀と大孔鏃にかんする研究略史と、前稿の検討結果の概要をまとめたところで、両器種の弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭における九州地方内での分布を改めて確認しておきたい。

(1) 素環刀の分布(図6)

II型c類素環刀は、福岡平野・中九州地域内にまとまり、地域外の分布は両地域の間地点である筑紫平野の中部に限られる。また両地域は、多孔鉄鏃が卓越する地域であることも、特筆すべき事項である。その一方で、唐津平野(中原遺跡)で製作されたと考えられるI・II型b類素環刀は、朝鮮半島中西部に類例を持つ舶載品とみるII型a類と分布域・出土遺跡を共有しつつ、より広範囲に点在する傾向にある。これは、自家消費量を圧倒的に超える生産量が指摘されながら(土屋2014)、その供給先が唐津平野内にみえない、中原遺跡産鉄器の流通先を示す可能性が考えられる。また同時に、II型a類とI・II型b類素環刀が同様の流通経路で運ばれていた可能性も示唆する。

(2) 大型透孔付鉄鏃の分布(図7)

九州地方内において、鉄鏃の身部に大小の穿孔を施す資料に地域性が存在することについては、前稿においてすでに言及している。具体的には、関の無いB・C型の鏃身を持ち、3・4類に区分される超大型の透孔を穿つものが、有明海沿岸から筑後川上流域に分布しており、門前遺跡の破片資料(図5-14)をくわえるならば、西北九州地域にまで分布域を広げることになる。大孔鏃の類例が多い周防灘沿岸地域では、関の有無にかかわらず、徳永川上遺跡が位置する京都郡一帯に2類の分布が多く、その周辺に1類が分布している状況がみとれる。

(3) 両器種の分布状況からみた肥前西部

多数のII型素環刀や大孔鏃を保有する周防灘沿岸地域は、今回取り扱わないI型素環刀や多孔鉄鏃も加味すると、九州地方内で突出して副葬鉄器量が多い。しかしながら、①鍛冶関連遺物や遺構の出土がみられない点、②九州各地で製作されたと考えられる資料の分布がモザイク状に混ざる点、③集落からの出土がほとんどない点などから、鉄製武器の消費地域としての様相が強いことをすでに指摘している(立谷2017・2020)。西北九州地域と佐賀平野西部を含めた肥前西部でも、上記の三点が当てはまることから、消費地域としての様相が強いことは確かである(註6)。一方で、台付甕を主体とする地域の長崎県内の北端とされる門前遺跡において(宮崎2012)、唐津平野産とみられるII型b類素環刀と、有明海沿岸地域に分布するB型4類大孔鏃の両者が出土している事実は注目される。また、有明海沿岸地域でも両鉄器の分布域は近似しており、同じ遺跡から出土する事例も複数確認できる。

Ⅳ. 肥前型器台からみた九州地方諸地域の関連性

前章で整理した分布状況から、唐津平野と西北九州地域、そして有明海沿岸地域において、II型b

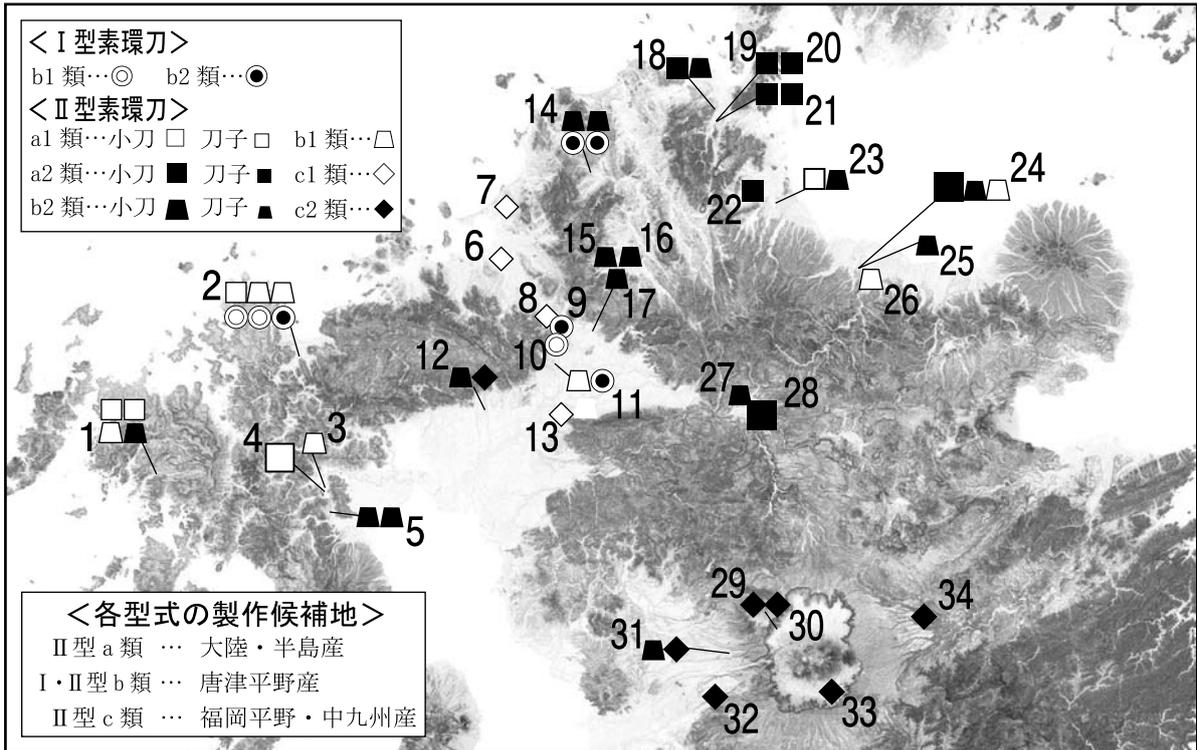


図6 本稿で取り扱う素環刀（I型b類・II型）の分布

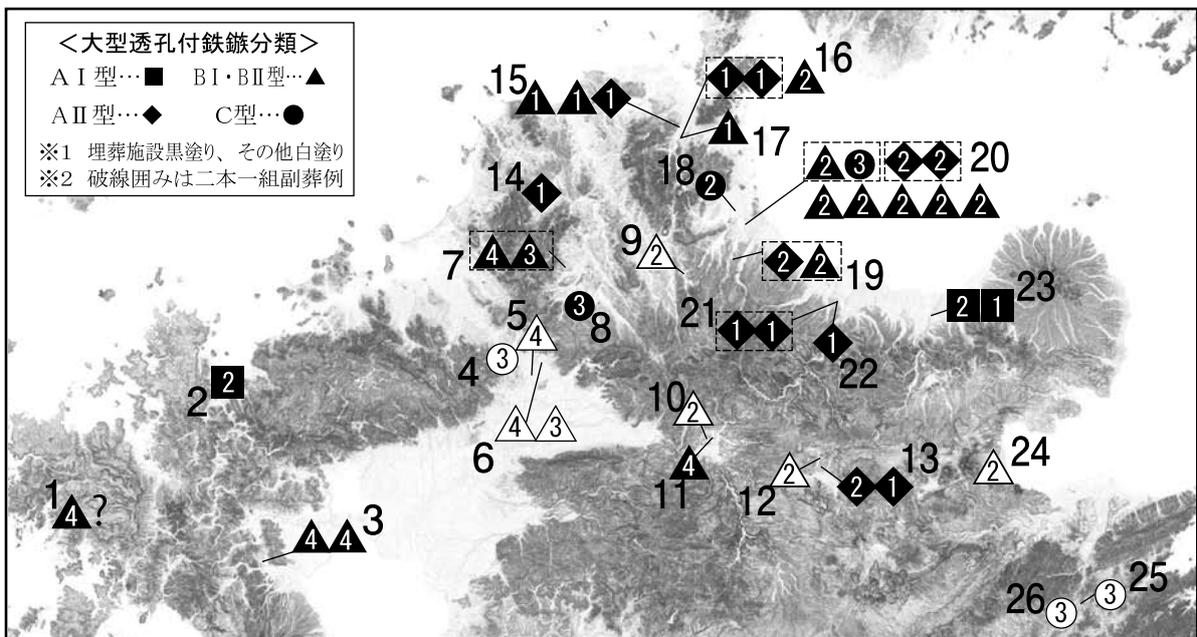


図7 大型透孔付鉄鏃の分布

類素環刀とB型4類大孔鏃という共通した鉄製武器が分布している事実が確認できた。

これにより、唐津平野と西北九州地域、筑後川上流域を含む有明海沿岸地域の関連性が想定可能となった。また、この中でもⅡ型b類素環刀は、周防灘沿岸地域に多く分布するほか、九州地方外では、山口県朝田墳墓群や広島県大町七九谷遺跡など、西部瀬戸内地域にまで分布が確認できる。

鉄製武器以外の遺物の中で、唐津平野、西北九州・有明海沿岸地域にまたがって分布し、尚且つ弥生時代後期後半～終末期に盛行期を持つものとして、「肥前型器台」の存在が挙げられる。肥前型器台は、後述する研究史上でも、その系譜が瀬戸内地域にあることが指摘されており、上述したⅡ型b類素環刀の存続時期や分布とも重なる点があり興味深い。

以上のことから、ここではまず、肥前型器台の研究略史を確認し、分布状況の整理を試みる。

(1) 肥前型器台の研究略史

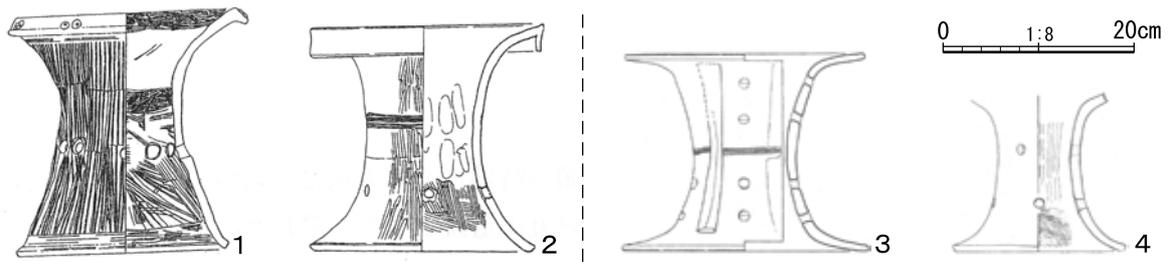
肥前型器台の研究史については、すでに宮崎貴夫氏によって詳細にまとめられているため(宮崎2014)、ここでは、宮崎氏の論考を参考にし、本稿に関連する内容をまとめる。現在、「肥前型器台」と呼称される「透かしある器台」について最初に言及したのは、小田富士雄氏とされる。小田氏は、1967年刊行の長崎市深堀遺跡の報告書内で、透かしのある器台が北九州には類例がなく、瀬戸内系土器に由来を求めると、この時すでに核心を付いた推定を行っている(小田1967)。この後、肥前型器台は、長崎・佐賀両県の発掘調査によって類例を増やしていく。特に、南島原市口之津貝塚や、武雄市茂手遺跡の調査報告の際には、改めて西部瀬戸内地域との関連が指摘されつつも、この時点では有明海沿岸地域と瀬戸内地域を結ぶ中間地帯(北部九州)での類例に乏しく、その系譜の解明には至らなかった(松藤ほか1975、原田1986)。

2000年代前半には、これまでの出土資料や宮崎氏による分類・変遷案(宮崎1986)を踏まえた上で、上田龍児氏による研究がなされた(上田2004)。上田氏の研究は、口縁部形態・筒部文様に基づく分類とその組み合わせの時期的消長の指摘、その用途や系譜についてなど多岐にわたる。本稿内で特に重要なのは、東北部九州(本稿でいう周防灘沿岸)地域において、弥生時代後期前半には、筒部に円形透かしを施し、口縁部に瀬戸内地域の影響がみられる器台(図8-1・2)が出現していることに触れ、瀬戸内地域に出自があると考えられてきた肥前型器台は、直接的には東北部九州地域の影響を受け、成立したものであると指摘したことである。また、上田氏が示した分類・変遷案(図9)では、古い特徴を持つ肥前型器台は、「円形透かし+方形透かし」または「円形透かし」のみを持ち、形式的に新しいものは、「方形透かし」だけのものが多い特徴にあるとされる(註7)。

近年では、肥前型器台に対して、九州地方各地の類例が再集成され、現在の到達点というべき様々な指摘がなされた(肥後考古学会編2014、長崎県考古学会編2015)。特に、熊代昌之氏・上田氏により、福岡県域の肥前型器台が再集成されたことによって、かねてからの課題であった、有明海沿岸地域と瀬戸内地域の中間地点の様相が明らかになったことは大きい(熊代2014、上田2015)。これにより、福岡県内において、周防灘沿岸地域に分布する器台は円形透かしが主体となる中で、筑後川流域の一部にも、円形透かしが確認される状況が明らかになった(図8-3・4)。くわえて、佐賀県域の資料を対象にした石橋新次氏の検討により、佐賀平野西部(武雄地域)に古い時期のものが多い傾向が指摘され、武雄地域を起点に、佐賀平野東側の他地域への展開・伝播が想定されている(石橋2014)。

実際、武雄地域に位置する茂手遺跡や東宮裾遺跡、みやこ遺跡の資料(図9-2・3)をみても、円形透かしを伴っていることが多く、瀬戸内・周防灘沿岸地域からの影響や、有明海沿岸地域内での波及を推定する場合には、円形透かしを持つ器台の流入状況の把握が重要であると考えられる。

以上をまとめると、現段階において、九州地方全体の資料をもとにした、肥前型器台研究の素地は



1. 長野小西田遺跡 2. 赤幡森ヶ坪遺跡 3. 宮の前 A 遺跡 4. 小田道遺跡

図8 周防灘沿岸地域（左）と筑後川流域（右）の円形透かしを持つ装飾器台（S=1/8）

後期後半 （新段階）			
後期終末 （古段階）			
後期終末 （新段階）			
古墳時代 初頭		<p>1. 東山田一本杉遺跡SB282 7. 茂手遺跡SK422</p> <p>2・3. みやこ遺跡SK324 8. 宇土城跡包含層</p> <p>4. 千住遺跡 2区SK3135 9. うてな遺跡10号B溝跡 3層</p> <p>5. 牟田寄遺跡SK179 10. 久米遺跡第1号方形周溝墓</p> <p>6. 村中角遺跡SD085</p>	

図9 有明海沿岸地域の肥前型器台の変遷（S=1/8）

整いつつあり、円形透かしや口縁部の特徴など、瀬戸内地域の土器の影響を加味し、周防灘沿岸地域からの伝播状況を整理することが課題として考えられる。

しかし、本稿の紙幅や筆者の力量から、これ以上の肥前型器台へ考察を深めることは難しい。そこで今回は、有明海沿岸地域への周防灘沿岸地域からの影響を考えるために、九州地方北半部における透かしを持つ器台の出土遺跡を整理しておき、今後の検討に備えることとしたい。

(2) 九州地方北半における肥前型器台とⅡ型b類素環刀の分布

肥前型器台の分布図の作成にあたっては、安定した器種として肥前型器台が成立するとされる(上田 2004)、弥生時代後期後半以降の資料を対象に、2014・15年に集成された各地の資料を参考にして古墳時代前期初頭以前までの時期幅で整理を行った。なお、上田氏が2015年に福岡県の資料の再検討を行った際には、方形透かしを主体とする肥前型器台と、肥前型器台と共伴することの多い、円形透かしを持つ装飾器台を区分していることから、方形透かし・円形透かしのみの出土遺跡と両者が出土した遺跡、または二種類の透かしを持つ器台の出土遺跡を区別して表示した(図10)。

透かしを持つ器台の分布に着目すると、すでに各先行研究で触れられていることとも重なるが、瀬戸内地域の影響を受けた円形透かしを施す器台が周防灘沿岸地域と福岡平野に分布していることがわかる。西北九州地域と有明海沿岸地域では、方形透かしを持つ肥前型器台が卓越する一方で、佐賀平野西部と筑後川流域北半の両地域に、円形と方形透かしの両者を伴う遺跡が分布している状況がみとれる。ここで注目したいのは、佐賀平野西部と筑後川流域北半に共通する状況として、前章の図6・7で示したように、Ⅱ型a・b類素環刀やB・C型4類大孔鏃の集積がみられる点である。

このほかにも、大村湾沿岸・島原半島を除いた有明海沿岸地域・西北九州地域では、同一または近接する遺跡から、肥前型器台、Ⅱ型a・b類素環刀、大孔鏃B型3・4類が出土している場合が多い。このことは、これら三つの遺物の伝播・流通ルートに深い関連があったことをうかがわせる。

V. 九州地方北半部における伝播ルートと地域間交流

さて、Ⅲ・Ⅳ章において、素環刀・大孔鏃・肥前型器台の分布を確認した上で、冒頭で述べた各遺物出土遺跡の重複・近接状況を改めて示した。この章では、これらの出土遺跡の傾向から、当時の伝播・流通ルートについて、いくつかの想定を試みたい。この内、素環刀・大孔鏃については、前稿において流通ルートを想定したことがあるため、本稿では両鉄器と肥前型器台の比較を中心に進める。

(1) 肥前型器台の有明海沿岸地域への伝播ルートについて

有明海沿岸地域における肥前型器台の伝播・成立については、瀬戸内・東北部九州地域がその故地として指摘されていたことはすでに述べた。しかし、有明海沿岸地域と両地域の間資料が乏しいこともあり、近年でも瀬戸内系の「装飾器台」に排他的であった北部九州地域を経ずに、瀬戸内から九州東廻りで有明海へ入ってきた可能性が指摘されている状況にある(宮崎 2019)。

九州東廻りルートは、鉄器からはあまり様相がうかがえないが、南島原市今福遺跡では、群を抜いて肥前型器台が出土しており、弥生時代後期前半代において円形透かしを持つ器台が出土していることと合わせて、肥前型器台が「創作」された遺跡候補の一つと考えられている(宮崎 2019)。また、南九州地域でも、円形透かしを伴う装飾器台が存在することが指摘されている(上田 2004、中村・吉本 2015、河野・栗畑 2015)。このため、すでに宮崎氏によって述べられていることではあるが(宮崎 2015)、南九州地域から有明海沿岸への器台の流入・伝播ルートの有無の検証が求められるであろう。

この一方で、今回確認した、素環刀・大孔鏃の分布に再度目を向ければ、肥前型器台が現状分布しない筑後川上流域と周防灘沿岸地域南部にもⅡ型a・b類素環刀の集積が確認できる(図6)。またこ

の両地域は、地理的にも周防灘沿岸地域と有明海沿岸地域の中間地点でもあり、両地域で盛行する大孔鏃B型3・4類とA型1・2類の両者が混在して出土する地域でもある。さらには、墓域から出土することの多い大孔鏃が、集落から出土する事例が認められるのも、この中間地点付近や大野川流域などの別府湾岸の遺跡に限定されることも示唆的である（図7）。

つまり、現在大分県域である筑後川上流域（日田盆地周辺）が、周防灘沿岸地域と有明海沿岸地域の地理的中間地点であると同時に、鉄器の保有状況や消費習俗においても、両地域の要素が混在している地域であることが指摘できる。今後、土器などによる視点から筑後川上流域が、円形透かし器台が卓越する周防灘沿岸地域と方形透かし器台が卓越する有明海沿岸地域との結節点となっているかどうかを、九州東周りルートの詳細検討と合わせて検証することが必要である。

(2) 有明海沿岸地域内での交易ルートについて

有明海沿岸地域内の交易ルートについては、石橋氏による研究成果を参考にする（石橋 2012・2014）。石橋氏は、肥前型器台の佐賀平野内への展開・伝播が、西部（武雄地域）を起点に東側へ進行したことを想定しているほか、肥前型器台と素環頭刀子の分布・保持を象徴として、武雄盆地と島原半島が有明海内の海上交流ネットワークの核として強く結びついていたことをすでに指摘している。

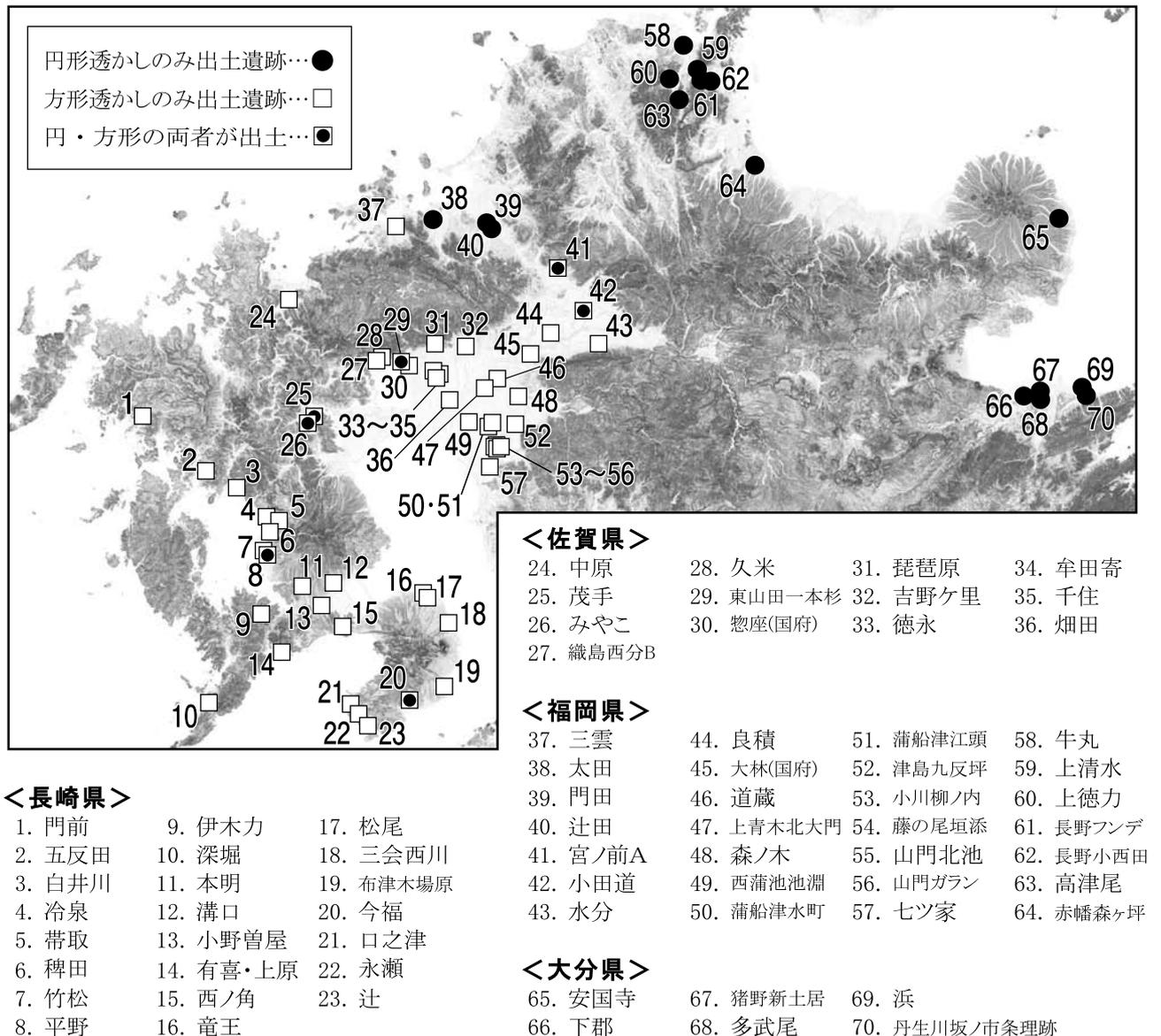


図10 九州地方北半部における肥前型器台出土遺跡の分布

今福遺跡や雲仙市竜王遺跡に代表される島原半島は、素環刀や大孔鏃の分布が確認できない地域である。一方で、弥生時代後期後半以降、「島原半島系土器」が有明海沿岸地域を主体に広がることが明らかになっており（石橋 2015、宮崎 2015 など）、広域的有明海交流ルートが島原半島の人々が担っていたとする考えもある。また、筑後川流域から佐賀平野西部、そして諫早地峡（船越）を抜けて大村湾へ入る航路の存在も指摘されている（宮崎 2015）。

以上のような土器類を主体とした有明海沿岸地域の交易に関する先行研究の結果は、本稿でも前述した鉄製武器の集積状況と重なる部分が多い。つまり、佐賀平野西部地域や筑後川流域北半に素環刀や大孔鏃の特定型式が集積している現象がみられることは、両地域が当時の主要航路による交易に寄与する役割が大きかったことを示すと言えよう。一方で、同様に交易に関与していたと考えられる島原半島において、鉄製武器の様相が不透明である要因については、今後検証していく必要がある。

島原半島の人々の交易への関与についての一つの考えとして、宮崎氏の説を挙げておきたい。宮崎氏は、今福遺跡に多数搬入されている北部九州系の平底大甕が、米などを運ぶコンテナである可能性を推測しており、弥生時代後期以降に有明海沿岸平野部で需要が高まった「鉄」の対価物として、佐賀・筑後地方から大甕に入れた「米」を船に積み、北部九州へと運ぶ輸送を、島原半島の人々が担っていた可能性について言及している（宮崎 2012）。地理的に水田耕作地に恵まれなかった唐津平野以西の西北九州地域が交易の対価として「何」を求めていたのかという問いに対し、宮崎氏の説は非常に魅力的であり、現状では筆者も同意しておきたい。

（3）「九州島西廻りルート」について

次に、有明海沿岸地域と唐津平野を繋ぐ、西北九州地域について目を向けたい。九州地方西部の海域（西海）は、古くは縄文時代晩期から南海産の貝の交易ルート、いわゆる「貝の道」とされ、北部九州地域への貝の運搬を西北九州の人々が担っていたとされるが、弥生時代中期後半頃になると、貝の運搬に対して西北九州の人々の関与が減少する代わりに有明海沿岸地域の影響が強くなり、貝の道は有明海を通るルートに変化したことが指摘されている（木下 1996）。ところが、この貝の道の変化は、西北九州地域を通るルートを完全に衰退させたわけではないようである。

中原遺跡の発掘成果をまとめた小松謙氏は、遺跡内から出土した肥後系・島原半島系土器の存在に着目し、その流入経路を九州沿岸の西廻りルートと想定した（小松 2013）。また、中原遺跡内の鍛冶工房において、肥前型器台や肥後系高杯が出土すること、中九州地域と類似する有茎鉄鏃の製作が行われていることから、当該ルートの活発化の要因は、朝鮮半島から中九州地域への鉄素材の流通に伴う唐津平野・西北九州地域と島原半島・肥後地域の首長間交流によるという卓見した指摘を行った。

この小松氏の指摘は、弥生時代後期以降、有明海沿岸地域において「鉄」の需要が高まったとする先の宮崎氏の説と重なる点がある。また、中九州地域に分布する素環刀が、舶載品や唐津平野産と目されるものよりも技法の改変・省力化が進んでいることはすでに述べた。この点から、舶載品や唐津平野産の素環刀の模倣製作が中九州地域で行われた可能性が考えられる。さらには、前述した中原遺跡の鍛冶工房から肥前型器台や肥後系高杯が出土することは、鉄器から想定可能な技術伝播が中原遺跡において行われたことをうかがわせる一つの要素となりえる。なお、祖型から離れていく形での鉄器の形態変化は、九州地方内の鉄鏃が、西北九州地域からの距離が遠くなるにつれ、その変化の度合いを増すという秦憲二氏の指摘とも共通するものである（秦 2014）。

以上の点から、中原遺跡や中九州地域で鉄器生産が活発となる弥生時代後期後半以降、西北九州地域西方の海域は、新たに「鉄の道」として機能していた可能性が考えられる。この西北九州地域の中でも、門前遺跡は、台付甕を主体とする地域の北限でありつつ、糸島系大甕の南限ともされ、北部九

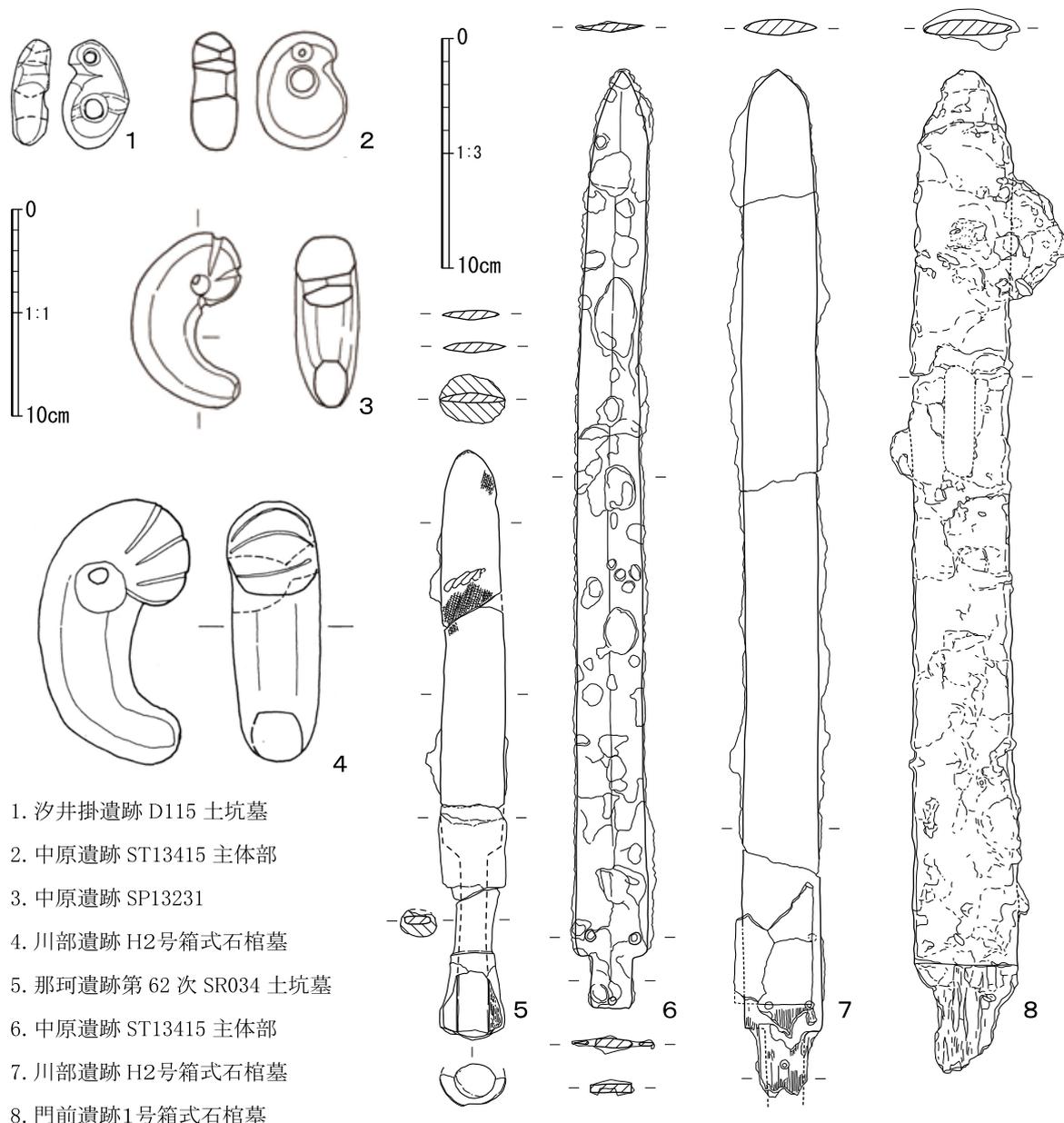
州地域と有明海沿岸地域の交流の拠点として重要な役割を担っていたことが指摘されている（宮崎 2012・2015）。くわえて、唐津平野産と目される素環刀と有明海沿岸地域に分布する大孔鏃の両者が出土している可能性があることも、門前遺跡の果たした役割を追認する要素と言える。

（4）玄界灘沿岸東進ルートについて

さて、これまで素環刀・大孔鏃・肥前型器台の分布や集積状況の整理を行ったことで、唐津平野から西北九州地域を通り、諫早地峡を越えて有明海へ入ったのち、筑後川を遡って日田盆地へ至り、さらには周防灘沿岸地域へ抜けるというルートの存在が推定可能となった。

この一方で、唐津平野から玄界灘沿岸を東進し、周防灘沿岸地域へ向かうルートの存在を想定することも必要である。この想定に重要なのが、宮若市汐井掛遺跡と宇佐市川部遺跡である。

まず、汐井掛遺跡の鉄製武器に目を向けると、唐津平野産の素環刀の集積が確認できるほか（図6）、福岡平野の関与が想定できるI型a類素環刀も三本出土しており、玄界灘沿岸の交易において重要な位置を占める遺跡だったことがわかる。また、汐井掛遺跡では、類例が限られるヒスイ製の柄型勾玉



1. 汐井掛遺跡 D115 土坑墓
2. 中原遺跡 ST13415 主体部
3. 中原遺跡 SP13231
4. 川部遺跡 H2号箱式石棺墓
5. 那珂遺跡第 62 次 SR034 土坑墓
6. 中原遺跡 ST13415 主体部
7. 川部遺跡 H2号箱式石棺墓
8. 門前遺跡1号箱式石棺墓

図 11 鉄剣・ヒスイ製勾玉の図面（玉類：S=1/1・鉄剣 S=1/3）

(図 11 - 1) も出土しており、中原遺跡との密接な関係がうかがわれる。一方、川部遺跡では、素環刀の出土はみられないものの、中原遺跡出土例(図 5 - 9)に類似した、A II 型 2 類大孔鏃(図 5 - 8)が出土しているほか、この時期としては、非常に大型のヒスイ製勾玉(図 11 - 4)が出土しており、ガラス製玉類が卓越する弥生時代終末期頃の九州地方内で特筆すべき事項である。

このように、中原遺跡出土鉄器との関係が推定できる遺跡において、ヒスイ製玉類が出土していることは、弥生時代の間、継続してヒスイ製玉類に固執し続けた唐津平野とのつながりを想定する上で非常に重要である(小松 2012・2020、米田 2017)。ヒスイ製玉類の副葬は、有明海沿岸地域では低調であることから、有明海沿岸を経由せずに、玄界灘沿岸を直接東進し、周防灘沿岸地域へと至る交易ルートが存在したことが推測できよう。

また、近年の鉄剣研究では、剣身を立体的に把握する観察視点のもと、全国的な資料の再検討が行われている(杉山 2015・2017、ライアン 2017・2021)。中でも、ライアン・ジョセフ氏によれば、中原遺跡出土鉄剣(図 11 - 6)群は、いずれも鉄剣の身部断面が鏑を持った薄い菱形であり(薄菱鉄剣)、形態的に強い共通性を持ち、同様な背景化で生産された可能性があるとされている(ライアン 2021)。

ライアン氏は、弥生時代終末期以降に列島内で主体となる鉄剣は、刃部断面が薄いレンズ型を呈する(薄丸鉄剣)特徴を持つことを指摘している(図 11 - 5)。よって、弥生時代終末期において、少数派の鉄剣が中原遺跡に集中するという特異な状況が起こっていることとなる。

以上の点から、想像をたくましくすれば、弥生時代終末期前後の列島内において少数派をなす薄菱鉄剣の製作に、中原遺跡の関与が想定できよう。実際、ライアン氏によって提示された薄菱鉄剣の出土遺跡をみれば、汐井掛遺跡や飯塚市向田遺跡、久留米市祇園山古墳など、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の遺跡からの出土が確認でき、特に前二者は、I・II 型 b 類素環刀(図 3 - 1)や B I 型 4 類(図 5 - 18)の大孔鏃の出土遺跡でもある。また、祇園山古墳も筑後川流域沿いに立地していることから、古墳時代前期初頭頃まで、玄界灘沿岸東進ルートや西廻りルートなどの弥生時代終末期の流通ルートが残存しており、中原遺跡の関与が推測される鉄器類が流通していた可能性が考えられる。

このような視点から想定すると、現状判断が保留されている資料の重要性や再検討の可能性も浮かび上がってくる。具体的には、先に触れた川部遺跡から出土している鉄剣(図 11 - 7)は、鏑で不明瞭なため位置付け困難とされているが(ライアン 2021)、大孔鏃・ヒスイ製勾玉からみた遺跡間の共通点や法量・平面形の類似から中原遺跡との関与を推定したい資料である。さらには、多量の II 型 a・b 類素環刀が出土している門前遺跡でも鉄剣(図 11 - 8)が出土している。報告書掲載図面からは、厚い凸レンズ状の身部断面と確認でき、厚手鉄剣かと判断できるが、同時に鏑が分厚く覆っているようにもみえることから、その身部断面形状には再検討の余地があると考えられる(註 8)。

(5) 古墳時代開始における交易ルートの動揺

これまでみてきたようにこの章では、鉄製武器や特徴的な出土品から、古墳時代開始前後の流通・伝播ルートを想定し、交易に関わったとみられる各地域の交流の様相に迫った。現時点での推定ルートを、土器の動きを元にした宮崎氏の想定案(宮崎 2019)を参考にしつつ、図 12 に示す。

肥前型器台は、有明海沿岸沿岸の台付甕を主体とする地域を中心に、何らかの行為の際に使用されたと推定されている。また、器台出土地の在来系土器の胎土との違いが無いことから、方形の透かし孔をあけるという施文が、有明海沿岸の各地域で共有されていたと考えられている(檀 2015)。

この一方で、肥前型器台を共有しつつも、大孔鏃や多孔鏃、素環刀の偏在性からみて、有明海沿岸各地域ごとに特色の違いが認められる。この偏在性は、鉄器などの交易品に対する各地域の取捨選択・独自性の表れとも考えられ、台付甕・肥前型器台を使用する社会的つながり、いわゆる「肥「ヒ」連合体」

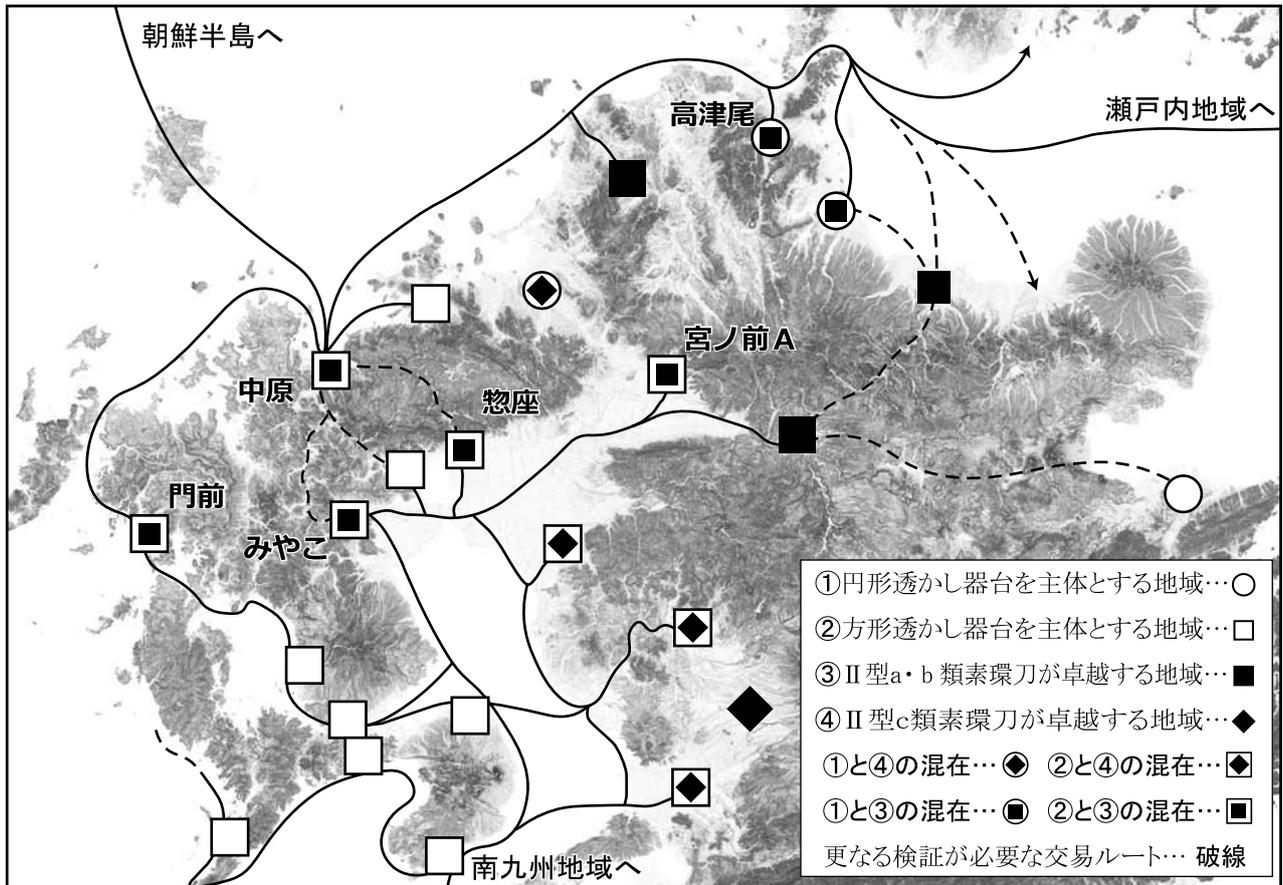


図 12 II型素環刀と透かしを持つ装飾器台をもとにした推定伝播ルート

(宮崎 2019) の緩やかな結合状況を反映しているとも捉えられよう。

近年の合同研究会の成果により、弥生時代終末期前後、有明海沿岸地域で盛行した台付甕・肥前型器台は、庄内式・布留式系土器の流入によって、古墳時代前期前半には消滅することが指摘されている(長崎県考古学会編 2015)。この現象に並行して、古墳時代前期初頭以降、中九州地域や唐津平野(中原遺跡)で行われていた鉄器生産も、集落自体の衰退によって古墳時代前期後半以降に継続した可能性は低い(小松 2012、杉井 2018、美浦 2018)。さらには、この両地域で製作されていたと考えられるII型b・c類素環刀も、肥前型器台と同様に、古墳時代前期前半には姿を消す。

この要因としては、古墳時代前期初頭(久住編年II A期)にはじまるとされる博多遺跡群の鉄器生産との関係が推定できる(久住 2019、次山 2020)。博多遺跡群では、鞆羽口や粒状滓、多量の鍛造剥片が出土しており、精錬鍛冶や低温・高温鍛冶といった一連の工程が行われていたとされ、古墳時代開始期の鍛冶技術の革新と示す遺跡と評価されている(村上 2013)。また、久住猛雄氏によれば、弥生時代終末期後半～古墳時代前期初頭(I B～II A期)の福岡平野において、楽浪系土器・馬韓土器の出土量が糸島半島を凌ぐようになり、対楽浪・帯方郡交易の中心が福岡平野へ移動し、「博多湾貿易」の成立に至ったことが指摘されている(久住 2007)。

したがって、北部九州における交易の窓口が糸島半島から福岡平野へと移り、福岡平野を核として、九州地方以東の各地域へ鉄素材・鉄器を含む品々が流通していく交易ルートが活発化した一方で、九州島西廻りルートをはじめとする九州地方内の弥生時代後期後半以来の鉄素材・鉄器の流通構造は変化を余儀なくされたとみられる。

古墳時代前期初頭以降、西北九州地域で大型鉄製武器が確認できなくなることはこの動揺を反映し

たものと考えられ、唐津平野と有明海沿岸地域を繋ぐ「鉄の道」は、この時期衰退の一途をたどったことが考えられるのである。

VI. おわりに

本稿では、鉄製武器から推測される九州地方内の交易ルートに対し、土器から検討されてきた有明海沿岸地域の地域間交流にかんする成果との比較・検証を試みた。その結果、これまで整理されてきた土器の動きと連動するように、西北九州地域・佐賀平野西部・筑後川流域北半において、鉄製武器（Ⅱ型素環刀・大孔鏃）の注目すべき偏在性が明確になった。

一方で、島原半島や筑後川上流域（日田盆地）など、肥前型器台・鉄製武器のどちらか一方のみが多数出土する地域をどのように評価するのかという課題も浮き彫りになった。この点については、肥前型器台の主体・客体の傾向や、保有する鉄器の形態を含めて、より詳細に検討を行う必要がある。

また今回は、唐津平野を含む西北九州地域と有明海沿岸地域の関係性を検証することを重視したため、鉄製武器をⅡ型素環刀・大孔鏃に絞って検討を行ったが、本来はⅠ型素環刀・多孔鏃などの他地域産の鉄器の流通状況も考慮する必要がある。具体例としては、平戸市里田原遺跡や佐賀市琵琶原遺跡から出土した薄丸鉄剣や、大村市冷泉遺跡出土のⅠ型 a 2 類素環刀は、唐津平野以外の北部九州地域で製作された可能性を考えておくべきであろう（杉山 2017・立谷 2020・ライアン 2021）。

本稿の目的とした、西北九州地域から有明海沿岸、筑後川流域の地域間交流の様相については、土器からの研究成果、指摘内容に依拠した点も多い。また、本稿中で触れることが出来なかった、唐津平野から背振山地を越えて佐賀平野へ至るルートや、日田盆地から周防灘沿岸地域へ抜けるルートなど、十分に検証出来ていない交流ルートも多数存在する。今後、鉄器類からより詳細な技術伝播・流通ルートを検証するには、武器以外の農具なども含めたより多くの器種を対象として、資料集成などの基礎的研究に今一度力を入れていくことが求められよう。

以上、現状では検証不足な点も多いが、本稿の整理・検討結果が、弥生時代後半期の鉄器類や、地域間交流の研究について何らかの契機となれば幸いである。

【謝 辞】

本稿の執筆にあたっては、唐津市末盧館主催の企画展『末盧国をたどる』（平成 30 年度）や『末盧より「西」を望む～西九州航路の盛衰と鉄をめぐる動静～』（令和 2 年度）の準備のための基礎調査や検討内容がもとになっている部分が多い。くわえて、令和元年に発表の機会を与えていただいた、第 16 回古代武器研究会での発表資料の作成や、翌年の論文執筆の際の成果が本稿を執筆する契機となったことは間違いない。また、日頃から意見を交換させていただいている唐津市教育委員会の面々や、資料確認・調査時に多大なるご協力を賜った関係機関ならびに協力者の方々へも改めて感謝の意を表したい。

また今回、『西海考古』第 12 号への投稿を快諾していただいた、古門雅高氏をはじめとする西海考古同人会の方々に末筆ながら感謝申し上げます。

【註】

註 1 本稿において、素環刀は素環頭（刀子・小刀・大刀）を包括する名称として用いる。ただし、法量区分によって別に説明が必要な場合は、この限りではない。

註 2 本稿で取り扱う資料の時期については、各鉄製武器研究者の時期比定（荒田 2019・杉山 2015、2017、ライアン

2021)を参照しつつ、蒲原氏・久住氏らをはじめとする九州各地の弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器編年に準拠する(蒲原2017・久住2015、2019など)。また、肥前型器台については、長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会(長崎県考古学会編2015)の資料集成を参考とした。

- 註3 1類・2類の分類に関わる関の深さについては、関直上の刃部幅と関下部の茎部幅の比によって区分しており、茎部幅/刃部幅=0.9以上を1類、未満をと2類とする。なお、Ⅱ型a類・b類に共通して、他の型式資料に比べ、刃部の研ぎ減りが確認できる資料が多いことから、両型式に限っては、関の深さを元にした細分はあまり意味をなさない可能性が高い。
- 註4 I型b類・Ⅱ型素環刀は弥生時代後期後半以降に後出し古墳時代前期前半に消滅する一方で、I型a類素環刀は、最も早く弥生時代中期後半から後期前半に出現し、古墳時代前期以降も主体的に継続して存在する違いがある。
- 註5 刃部範囲が図化されていない資料が多い現状では、弥生時代の鉄鏃にこの視点が十分生かされているとは言い難い。鏃身側面や、刃部範囲を示した実測図の蓄積が急務として挙げられる。
- 註6 近年、大村市帯取遺跡でも弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の鍛冶関連遺構・遺物がみつまっている(柴田編2021)。帯取遺跡の鍛冶炉は、床面を若干掘り下げたのちに、粘土を貼ることで炉床を構築しているとされ、砂丘上にあるがゆえに炉跡が検出されなかった中原遺跡の鍛冶炉を想定する上でも興味深い。また、後述する唐津平野から中九州地域へのルート上に位置する帯取遺跡での今回の発見は重要であり、大村湾周辺域でのさらなる事例の増加を期待したい。
- 註7 この点に関連しては、宮崎氏も円形透かしを持つ茂手遺跡や吉野ヶ里遺跡出土器台が、肥前型器台成立以前の過渡的な様相を示している可能性について言及している(宮崎2014)。
- 註8 門前遺跡では、舶載品とみられるⅡ型a類素環刀も複数出土していることから、厚手鉄剣が舶載されていた可能性も十分考えられる。また、非常に困難なことではあるが、先述した鏃の刃部範囲と同様に、「鉄剣には鏃があるはず/べき」などといった先入観を排した上で、鉄製武器全般に対し、報告書掲載図面の再点検作業が求められる。

【参考・引用文献】

- 東 潮 1986 「鉄・銅の武器—A 鉄剣, B 鉄刀, C 鉄戈, D 鉄矛」『弥生時代の研究』9 雄山閣
- 荒田敬介 2019 「鉄製武器からみた弥生時代における西日本の地域間交流」『弥生時代における東西交流の実態—広域的な運動性を問う—』西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会合同シンポジウム実行委員会
- 石橋新次 2012 「六角川流域の弥生時代集落」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 石橋新次 2014 「佐賀県における肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 石橋新次 2015 「佐賀県における台付囊と透かしをもつ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第1号 島根県古代文化センター
- 池淵俊一 2003 「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観』第7巻 小学館
- 今尾文昭 1982 「素環頭鉄刀考」『考古論攷』第8冊 奈良県橿原考古学研究所
- 上田龍児 2004 「(1) 器台形土器について」『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県・東十郎古墳群の調査』福岡大学考古学研究室調査報告第3冊 福岡大学人文学部考古学研究室
- 上田龍児 2015 「福岡県の状況」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 禹 在柄 1991 「素環刀の型式学的研究」『待兼山論叢』史学編第25号 大阪大学文学部
- 会下和宏 2007 「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』第23号 日本考古学協会
- 大澤元裕 2006 「杏仁形透孔付鉄鏃の特徴と展開」『古文化談叢』第55集 九州古文化研究会
- 大庭泰時 1986 「弥生時代鉄製武器に関する試論—北部九州出土の鉄剣・鉄刀を中心に—」『考古学研究』第33巻第3号 考古学研究会
- 小田富士雄 1967 「弥生土器」『深堀遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第5集 長崎県教育委員会
- 小田富士雄 1977 「鉄器」『立岩遺蹟』福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会・河出書房新社
- 大庭康時 1991 「北部九州における弥生時代の鉄鏃」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集
- 大村 直 1983 「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会
- 勝部明生 1981 「弥生時代の鉄製武器」『三世紀の考古学』中巻 学生社
- 蒲原宏行 1991 「古墳初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合—」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』

第16集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

- 蒲原宏行 2017 「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会
- 蒲原宏行 2019 『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 川越哲志 1993 『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- 河野裕次・案畑光博 2015 「宮崎県地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 川畑 純 2009 「前・中期古墳副葬鉄の変遷とその意義」『史林』第92巻 第2号 史学研究会
- 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究－貝の道の考古学』法政大学出版局
- 金 武重 2012a 「原三国～百済漢城期鉄器および鉄生産集落の動向」『日韓集落の研究』日韓集落研究会
- 金 武重 2012b 「原三国時代の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』
日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会
- 金 武重 2018 「韓半島中部地域初期鉄器～原三国時代鉄器生産―北漢江流域を中心に―」
『土器・金属器の日韓交渉』「新・日韓交渉の考古学―弥生時代―」研究会
- 久住猛雄 2007 「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』第53巻第4号 考古学研究会
- 久住猛雄 2015 「「奴国の時代」の歴年代」『新・奴国展』特別展「新・奴国展」実行委員会
- 久住猛雄 2019 「二・三・四世紀の土器と鏡―土器の併行関係と出土鏡からみた歴年代を中心として―」
『銅鏡から読み解く 2～4世紀の東アジア』勉誠出版
- 熊代昌之 2014 「福岡県における装飾器台の分布について」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 児玉真一 1982 「鉄製素環刀―集団墓出土資料を中心に―」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻
森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 小松 譲 2012 「3, 中原遺跡出土石製勾玉類について」『中原遺跡VI』佐賀県教育委員会
- 小松 譲ほか編 2012 『中原遺跡VI』佐賀県文化財調査報告書第193集 佐賀県教育委員会
- 小松 譲 2013 「2, 唐津地域出土の肥後系・島原半島系土器群」『中原遺跡VII』佐賀県教育委員会
- 小松 譲ほか編 2013 『中原遺跡VII』佐賀県文化財調査報告書第199集 佐賀県教育委員会
- 小松 譲 2014 「2, 中原遺跡出土の弥生時代終末～古墳時代前期の鍛冶関連遺物」『中原遺跡VIII』佐賀県教育委員会
- 小松 譲ほか編 2014 『中原遺跡VIII』佐賀県文化財調査報告書第203集 佐賀県教育委員会
- 小松 譲 2020 「唐津地域における古墳時代初頭前後の社会変革と地域間交渉」
『「再考・末盧国」～知られざる鉄の邑～』唐津市末盧館
- 柴田 亮編 2021 『大村市 市内遺跡発掘調査概報』大村市文化財調査報告書第45集 大村市教育委員会
- 杉井 健 2018 「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 国立歴史民俗博物館
- 杉山和徳 2015 「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会
- 杉山和徳 2017 「弥生鉄剣論」『日本考古学』第43号 日本考古学協会
- 高倉洋彰ほか編 2012 『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』
日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会
- 立谷聡明 2017 「弥生時代素環刀の地域性とその背景」『古文化談叢』第79集 九州古文化研究会
- 立谷聡明 2019 「九州地方における鉄製武器の普及―一刀剣・戈・有孔鏃を中心として―」第16回古代武器研究会発表資料集
- 立谷聡明 2020 「弥生時代の九州地方における鉄製武器の普及～武器の消費傾向からみた生産と流通にかんする予察～」
『古代武器研究』Vol.16 古代武器研究会
- 檀 佳克 2006 「有明海沿岸地域における前期古墳の動向」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
- 檀 佳克 2015 「甕形土器と器台からみた熊本と周辺地域との交流」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 次山 淳 2020 「倭王権の形成過程と博多遺跡群の鉄素材・鉄器生産―時間的な関係を中心に―」
『柳本照男さん古希記念論集―忘年之交の考古学―』柳本照男さん古希記念論集刊行会
- 土屋了介 2014 「3, 中原遺跡出土鉄製品・鉄片に関するまとめ」『中原遺跡VIII』佐賀県文化財調査報告書
第203集 佐賀県教育委員会
- 坪根伸也 2015 「大分県の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会
合同研究大会

- 豊島直博 2005 「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 豊島直博 2010 「第3節 韓国の鉄製刀剣と装具」『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
- 中村直子・吉本美咲 2015 「鹿児島県域の台付甕と器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 長崎県考古学会編 2015 『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 野島 永 1993 『弥生時代鉄器の地域性—鉄鏃・鉈を中心として』『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
- 秦 憲二 2014 「九州における弥生時代から古墳時代初頭の鉄鏃地域差の形成過程」
『先史学・考古学論究VI』龍田考古会
- 原田保則 1986 『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会
- 肥後考古学会編 2014 『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
- 福島和明ほか編 2006 『門前遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第4集 長崎県教育委員会
- 松藤和人ほか 1975 『口之津貝塚及び口之津烽火台遺跡調査報告』百人委員会文化財調査報告第5集 百人委員会
- 宮崎貴夫 1986 「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫 2011 「長崎県地域の状況について」『環有明海の交流—台付甕をめぐる諸問題—』
肥後考古学会・長崎県考古学会
- 宮崎貴夫 2012 「有明海をめぐる弥生時代研究の現状と課題」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』
肥後考古学会・長崎県考古学会
- 宮崎貴夫 2014 「肥前型器台および長崎県の状況について」『肥前型器台について』
肥後考古学会・長崎県考古学会
- 宮崎貴夫 2015 「長崎県の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
- 宮崎貴夫 2019 『長崎地域の考古学研究』昭和堂
- 美浦雄二 2018 「唐津平野周辺地域の集落と古墳の動態について」『集落と古墳の動態Ⅰ—弥生時代終末期～古墳時代前期—』九州前方後円墳研究会
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通 2013 「古墳時代前期における鉄器生産の諸問題」『東アジアの古代文化』114号 大和書房
- 柳田康雄 1997 「(2) 大型透孔付鉄鏃について」『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
- 米田克彦 2017 「玉類の副葬からみた楯築墳丘墓の性格」『シンポジウム記録11 楯築墓成立の意義』考古学研究会
- ライアン・ジョセフ 2017 「長茎鉄剣の成立過程」『古代学研究』第212号 古代学研究会
- ライアン・ジョセフ 2021 「弥生時代の北部九州における鉄器生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号 考古学研究会

【遺跡報告書出典】（発行年順、報告書は巻数省略、参考文献との重複分や表分布図に表示のみは割愛。）

- 池辺元明編 1979 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXVIII』福岡県教育委員会
- 池辺元明編 1980 『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告書2』福岡県教育委員会
- 清水宗昭編 1985 『舞田原』犬飼町教育委員会
- 原田保則編 1986 『みやこ遺跡』武雄市教育委員会
- 小林義彦編 1987 『唐原遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会
- 児玉真一編 1989 『乙隈天道町遺跡』福岡県教育委員会
- 高橋 徹編 1989 『草場第二遺跡』大分県教育委員会
- 峯崎幸清編 1990 『古子遺跡』塩田町教育委員会
- 柴尾俊介編 1991 『高津尾遺跡4』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 七田忠昭ほか編 1992 『吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会
- 毛利哲久編 1992 『穂波地区遺跡群第4集』穂波町教育委員会
- 草場啓一編 1993 『隅・西小田遺跡群』筑紫野市教育委員会
- 末永弥義編 1995 『北垣古墳群』豊津町教育委員会
- 柳田康雄編 1996 『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会

飛野博文ほか編 1997『金居塚遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会
長家 伸・榎本義嗣編 1999『那珂22』福岡市教育委員会
野口典良ほか編 2005『八幡中学校遺跡』玖珠町教育委員会
真田博幸編 2006『菅生台地と周辺の遺跡XⅦ』竹田市教育委員会
江藤和幸編 2010『川部遺跡南西地区墳墓群』宇佐市教育委員会
佐藤正義編 2011『ヒルハタ遺跡』筑前町教育委員会
石橋新次ほか編 2014『宮ノ前A遺跡・柏木宮ノ元遺跡』筑前町教育委員会
幸時桂子・渡邊隆行編 2017『元宮遺跡5次』日田市教育委員会

【挿図・表出典】

図1・2：筆者作成。

表1：筆者作成。

図3-1～9、13～17は筆者実測。10～12は各文献より再トレース。

表2：筆者作成。

図4：筆者作成。

図5-6・8・9・12・13・16～18・20は筆者実測。1～5、7、10、11、14、15、19は各文献より再トレース。

図6・7：筆者作成。

図8・9：上田2004掲載図面を一部転載し、レイアウトを変更。

図10 長崎県考古学会編2015掲載の各論考を参照し、筆者作成。

図11-1～4は各文献より一部転載。5～8は各文献より再トレース。

図12：宮崎2019を参考に筆者作成。

※1 図6・7・10・12の分布図には、国土地理院電子地図を使用した。

※2 各再トレース資料については、原図から断面の配置などをレイアウトの統一のため変更している。
また、再トレース時の事実誤認による実際の資料との相違がある場合、すべて筆者に責がある。